

日本記者クラブ会報

第 433 号
2006 年
(平成 18 年)
3 月 10 日 発行

〒100-0001
東京都千代田区内幸町二丁目二番一
日本プレスセンタービル
© 社団法人 日本記者クラブ
http://www.jnpc.or.jp

NHK 会長、ライブ社長が会見

「放送と通信融合」で松原座長も

ニュースになる人を招き会見をしてみよう——。これが滝鼻理事長、宇治企画委員長がとりわけ強調している点。確かにニュースが出ない記者クラブというのは、ネズミを捕らないネコみたいなもの。現役記者からはますます縁遠い存在になるし、ニュースソースにとっても魅力的な場所でなくなる。放置すれば、確実に日本記者クラブの地盤沈下につながる。

もっとと熱々の湯気が立っているゲストを招くべく努力した結果、先月は3つの会見が実現した。①「通信・放送の在り方に関する懇談会」座長の松原聡東洋大教授②橋本元一NHK会長③平松庚三ライブドア社長。どれも出席者は150〜200人規模になった。

①はインターネットでその都度会

議の結果を報告しているが、項目ばかりのメモ書き程度の内容。金融と証券のビッグバンと同列に、放送と通信の融合を間違っても単純に考えられては大変なので、説明に来ていただいた。

②は公共放送が国民の共有財産でもあるので、改革方針とあり方論を広く訴える場として、クラブを活用してもらおうのがよいと考え、お願いした。これまで同業トップがゲストとして登場した例はなかったが、快諾してくれた。

③は結果的に堀江容疑者らの再逮捕の翌々日というタイミングになった。各社の個別希望には十分対応できないのでと応諾してくれていた。平松社長は冒頭発言を30分にし、1時間余りを質疑応答の時間に充ててくれた。

すべてうまくいったわけではない。①がらみで竹中総務相にもお願いしたが、断られた。いろいろおっしゃりたいこともあるだろうし、利用者の不安を沈静化させる必要もあるだろうと思い、日航の新町敏行社長にも声をおかけしたが、当面はムリとの返事だった。

ところで、イラン核開発のさなかドイツのシュタインマイヤー新外相の会見も行ったが、ほとんどニュースにならなかった。トリノの日本選手同様、わがプレスも内向きでハングリ精神不足なのだろうか。

韓国は長い政治の季節へ

クラブ取材団(4〜7p)に写真・記事など)に同行して韓国へ行ってきた。与党・ウリ党の代表選(候補8人)真つ最中の2月12日、羽田を出発した。帰国日の翌日18日、党大会で投票が行われ、鄭東泳前統一相がライバルの金種泰前保健福祉相を抑え当選した。

15日、全州で約1500人が集まった体育館で、候補全員がキャラバ

ンをくみ地方都市を回った、最後の演説会を取材した。熱気とスピーカーからの大音響に圧倒された。元MBCキャスターで男前の鄭氏の演説は「不肖の息子が母なる出身地へ帰って来ました」で始まった。もっぱら支持者の情に訴え、「共に立とう」といった調子の絶叫型だった。

全斗煥時代に投獄経験もある歴戦の士・金氏の方は現実的だった。目下、次期大統領候補として世論の支持が一番高い高建元総理らとの大連合で、5月末の地方選に臨み、昨年の補選、地方選で全敗し窮地にあるウリ党を勝利に導けるのは自分しかない」と主張した。

韓国の政治はすでに来年末の大統領選に向けて動き出している。今回、事前の折衝で盧武鉉大統領との会見がムリと分かったため、要人会見はポスト盧武鉉に絞った。が、現在無所属の高建氏は、このところ全く国内プレスとも会っておらず断念しなければならなかった。

それでも若宮啓文団長の尽力で、前記の与党2人と、野党側の有力候補・朴権恵ハンナラ党代表、李明博ソウル市長との会見が実現した。また、国連事務総長に出馬宣言をした直後の潘基文外交通商相にも会うことができた。(専務理事 岩崎玄道)

中国の積極外交と日本の内向き志向

言力政治の巧拙



小島 明

2006年1月末に開いたダボス会議は、中国とインドの積極外交の大舞台となった。会議全体の主題も、ずばり「中国とインドの台頭」。会議は非政府組織（NGO）による民間の会議だが、中印両国とも政府が直接仕立てた大型の使節団を送り込み、田中明彦氏が言う「ワールド・ポリテイクス」ないし「言力政治」を最大限に演じ、その存在感を強烈に印象づけた。

今年も89カ国から元首級15人、閣僚級約60人をはじめ多くの多国籍企業トップを含む約2300人が参加し、討議の様子は各国メディアや主催者であるWEF（ワールド・エコノミック・フォーラム）のウェブサイトに、音声付のウェブ放送等を通じて詳細に世界に向けて伝えられた。ことしの主要国首脳会議（G8サ

ミット）の議長国であり「エネルギー外交」をめぐる世界的な論争の渦の中にあるロシアがほとんど参加しなかったといった不自然さもある会議だが、それだけに春節直前のぎりぎりの日程調整をして参加した曾培炎副首相ら中国グループの存在感が増した格好である。曾副首相らは「中国の発展なくして世界の発展はない」と断言した。「中国の輸入は世界第3位、市場を提供して世界の成長に貢献している。日本や欧州の貢献は少ない。日欧ともグローバルなエンジンではなくなった」といった中国参加者の遠慮のない発言があった。タイ出身のスパチャイ世界貿易機関（WTO）前事務局長は「中国にとって良いことは、世界全体とは言えないまでも、アジア地域にとって良いことだ」とまで言い切った。

会議開催中に中国の昨年の国内総生産（GDP）が実質9・9%も伸び、フランス、英国を抜き世界4位のGDP大国になった可能性もあるとのニュースも流れ、「世界のエンジン・中国」のイメージが一層濃くなった。もちろん、中国は国内には深刻な格差、環境劣化、腐敗、設備投資の過剰など多くの問題を抱え、対外的にも強引なまでのエネルギー・資源確保政策で摩擦を起こすなど、直面する課題も多い。しかし、中国はことし、明らかに、このダボスの大舞台を最大限に活用する戦略をとった。

一方、世界第2位のGDPを有する日本は、この大舞台でいつも過度に控えめである。参加者が少ない。こととりわけ閣僚の参加が少なく、ことしは二階俊博経済産業相、竹中平蔵総務・郵政民営化担当相らが顔をみせたが、中国の曾副首相が2000人もの聴衆を前にした「全体会議」をフルに活用したのに対し、100人程度しか集まらない分科会しか舞台がなかった。しかも「小泉改革は持続するか」といったテーマで「国内的な議論」をしただけだった。

閣僚、政治家の参加に関してだが、昨年は閣僚と野党の幹部がドタキャンしてしまった。国会審議の日程上の理由だという。だが、国会日程を与野党で調整して、この大舞台を利用するという発想は無理なのか。昨年は、G8の議長、ブレア英国首相が冒頭の全体会議で大演説をぶち、しかもサミットのテーマをこの舞台ですべて発表し、ことしの世界の

高成長を続ける民主主義・自由経済であり「情報技術（IT）、ソフトウェアをはじめ多くの分野での高い技術水準」である。インドはダボス会議用に特別のロゴまで作り、胸のバッジやホテルの垂れ幕に掲げた。

言葉で訴える「場」の発信力

議論をリードした。

「ソフトパワー」論のジョセフ・ナイ氏や田中明彦氏が言う通り、軍事力でも権力政治でもなく、文化や構想力の魅力をはじめとする非軍事の様々な魅力を持つ影響力がますます重要になりつつある。また、それを言葉で訴える「言力」が重要になる。それをタイミングよく、また舞台、あるいは「場」自体が発信力をもち、人々を引き寄せる磁力を有する「磁場」でその「言力」を発揮することが重要である。ダボスの舞台も、少なくともそうした「磁場」のひとつである。

世界政治における通説なるものも、こうした舞台、磁場を通じて形成されることが多い。しかも、ひとたび通説になってしまつと、あとでいくら証拠を用意して反論しようとしても、なかなかひっくり返せなくなる。1997-98年のアジア通貨・金融危機の際の議論がその一例である。日本は危機発生の直後から具体的な支援措置も講じたし、支援国会議を主導するなど、日本としてはこれまでにない即座に適切な措置を講じたと言える。だが、危機直後のダボス会議のヒーローは「アジア危機を食い止めるためにもわれわれは人民元の切り下げは行わない」と

大聴衆の前で繰り返した中国だった。中国はアジア危機の数年前に大幅な元切り下げを行っており、その後の中国の経済動向を考えれば、切り下げなどできるはずもなかった。にもかかわらず、何もしないという政策で中国はアジアの救世主だという「通説」がダボスで生まれた。そのとき、日本の発信は少なかった。

ASEAN諸国の懸念

「アジアの日中印3国関係」についてのセッションでは、「日本がどんなアジア戦略を持っているのか、ほかの分野もそうだが、日本の考えていることがわかりにくい」とシンガポールの某氏が指摘した。悪化した日中関係への関心もあった。「靖国」は次第にグローバルな言葉になりつつある。そのことは、日本人の心情は別とし、現実問題として「靖国」は単に日本の国内問題である段階を越えた。ある意味で、単なる日中2国間問題をも越えた面がある。日本国内では「靖国で議しても中国は次の対日カードを持ち出してくるだけ」という議論があるが、アジアの参加者の一人は「靖国問題をうまく処理しないと、これまでの日本の度重なる謝罪も本気でなかったとアジア諸国に受けとめられてしま

かねない。その行き着くところは日本の孤立になりかねない」との懸念を打ち明けてくれた。領土にからむ紛争は世界中にたくさんある。だが、それらはもっぱら当事国同士、2国間の問題にとどまる。

中国の台頭を目の当たりにして中国脅威論も当然、存在する。ダボス会議では中国は「平和的台頭」論を繰り返して、輸入市場の提供を通じてアジアと世界の経済のエンジン役を果たしていることを強調した。中国はまた、「アジアの地域統合において東南アジア諸国連合(ASEAN)のイニシアチブが重要であり、これまでもASEANの貢献は大きい」とASEAN諸国をしきりに持ち上げた。そのASEAN諸国に対して、中国は開発支援の援助を顕著に拡大しつつある。日本は、政府開発援助(ODA)執行の組織改革にばかり傾注し、援助理念をしっかりと鍛え損なっていないだろうか。

グローバル社会での座標軸を

1991年は日本のバブル景気が崩壊した年だ。その年に旧ソ連は崩壊し、冷戦が終わり、世界中が活力ある経済を築こうと一斉に制度改革大競争を展開した。古い制度はほとんど捨てられた。どの国にも既得

権、それを守ろうとする抵抗勢力はあるが、多くの国が「発展する未来」を選択した。ダボスのテーマ国となった中国は91年のソ連崩壊を見せつけられながら危機意識をもって92年に改革・開放へのアクセルを一気に踏み込んだ。中国に10数年おくれたインドの改革が91年に行われたことも象徴的である。日本を取り巻く世界の状況は91年を分水嶺としてパラダイムシフトを見せた。

日本はたまたま同じタイミングでバブル崩壊とそれに続く長期大停滞にはまり込み、こうした世界の新しい現実を直視しそこなつたきらいがある。ダボスに吹く時代の風にあたって、世界の時代潮流と日本の国内論議とのズレを痛感させられた。

バブル崩壊後の三つの過剰(雇用、設備、債務の過剰)への後ろ向き調整がほぼ完了したいま、日本の経済・社会がいま立っている位置をグローバル社会の座標軸の上で確認しそれを直視することが、次の日本の選択の出発点となる。

こじま・あきら会員 1965年日本経済新聞入社 論説主幹 専務・論説担当などを経て 04年から日本経済研究センター会長・日本経済新聞社顧問 1989年度日本記者クラブ賞受賞



鄭東泳 前統一相



金槿泰 前保健福祉相



リングアナウンサーよりも大仰な紹介で、花束を贈られたりして入場した8候補は、そろって会場の歓呼に応えた（全州・ウリ党代表候補演説会）

▲国連事務総長への正式出馬声明をした直後、会見に応じてくれた潘基文外交交通商相に、クラブタイを贈りお礼を述べる若宮団長（朝日）

* 関連記事、日程、参加者リストは6、7Pに掲載



崔相龍元駐日大使（高麗大教授・左から2人目）と朴哲熙ソウル大教授（左）を招いての昼食会（ロッテホテル）



コリア・プレスセンターでの韓国記者(東京特派員経験)との交流会で（右は山陰中央新報の壺倉記者）



人材のサムスン、教育のサムスンを強調した申泰均常務・右（龍仁・人材開発研修所）



李明博 ソウル市長(ハンナラ)



朴槿恵 ハンナラ党代表



浦項のポスコ社のVIP署名簿に記名する上村副団長(読売)



5月の市長選に再出馬せず、大統領選に照準を合わせることになる李ソウル市長との記念写真が、ホテルに戻ると封筒に入れられ全員の分届いていた



▲ポスコで圧延工程などを見学したあと、MBCの取材に応じる小林論説主幹（東京新聞）



日に4200台が米国、中東などへ専用船▶で輸出されていく(蔚山 現代自動車)

歴史問題 小泉後に関心移行 与野党の大統領候補と会見

▼副団長 影山 日出夫
(NHK解説主幹)

今回の取材団の主たる目的は、ポスト盧武鉉をうかがう政治家たちと会うことだった。一連の会見では、日韓の歴史問題が次のリーダー候補たちにも影を落としていることが浮き彫りにされ、両国関係の将来が必ずしも楽観を許さないことを印象付けた。

与党ウリ党の新代表に選出された鄭東泳前統一相は、盧大統領は小泉政権中の関係改善には何ら期待を抱いていないと取材団に明言した。次期大統領候補として世論調査で上位に立つ野党ハンナラ党の李明博ソウル市長も、「両国国民は日韓新時代に向けて準備を終えている。政治家だけがまだだ」と首脳レベルで角を突き合わせる異常な関係にいら立ちを抑え切れない様子であった。

靖国慎重派への期待も

そうした中、韓国政界の関心は靖

国問題をめぐる小泉首相の対応から「ポスト小泉の日本の指導者はどうするか」に明らかに移行しつつある。李氏は去年安倍官房長官に会い、「日本の国際的地位にふさわしい対応」を求めたという。鄭氏も「党代表に選ばれたら、適切な時期に安倍氏に会いたい」と関心を隠さない。

韓国でも「ポスト小泉は安倍氏」を念頭に対日戦略を描きつつあるというところであろうか。しかし、安倍氏については、祖父譲りの「親韓国派」との期待がある一方で、歴史認識では「合意に至るのは簡単でないと心配している」（ウリ党の金植泰前保健福祉相）との懸念があるのも事実だ。韓国有力紙の在京特派員経験者との懇談では、靖国慎重派の福田元官房長官に対する待望論が韓国側に根強くあるとの声も複数聞いた。「小泉政権さえ終われば」との展望も持ち得ず、日本の後継総裁レ

ースを複雑な思いで見守っているといるのが、韓国政界の現状のようであった。

年内に南北会谈開催か

歴史問題とは対照的に、盧政権の北朝鮮政策については与野党の見解が鋭く対立した。ウリ党の鄭新代表は、去年、自らの訪朝で南北首脳会谈の開催に合意していたことを会見で初めて明らかにし、「今年中に開催されるだろう」と融和政策の進展に自信を示した。

これに対して、ハンナラ党の朴權恵代表（ご存知と思うが朴正熙元大統領の長女である）は、「盧武鉉流の無原則な対北政策が韓国内に分裂と葛藤を生んだ」と激しく批判。6者協議の進展のためにも韓米関係の強化こそが急務だと強調した。

盧政権の支持率低迷で5月の地方選挙では与党敗北が確実視されている。来年12月の大統領選挙に向けても、今のところ野党候補が優勢である。ハンナラ党政権が出来れば、韓米関係を重視する方向で軌道修正が行われるのはほぼ間違いない。

日米韓の枠組み再構築は北朝鮮への圧力強化につながる。しかし、その時日韓関係が今の閉塞状況が続いていたとすればどうであろうか。東

アジアでの日本と中韓両国の関係に懸念を強め始めたと言われるアメリカが黙認するだろうか。歴史問題をめぐる影がそこまで及ばないという保証はないように思われた。

刻印される過去の重圧

取材団は韓国の世界的な企業を訪問する機会にも恵まれたが、サムスングループの大規模な研修施設で同社幹部と昼食を取りながら聞いた話が印象的だった。

「新規採用者はここで徹底して頭を切り替えさせます。韓国の大学生の間にはいまだに『反大企業』意識が強いですからね」

国民の中で、独裁政権時代の強権政治と財閥企業つながりが問題視されて来た韓国経済。その意識を払拭するのが新人研修の目的というところ、韓国社会に刻み込まれた過去の重圧を感じる。そのさらに奥深く刻み込まれた「記憶」が歴史問題だとすれば、簡単に消えるはずがない。「靖国問題の処理によつては、ポスト盧武鉉の方が日韓関係は今より複雑になる可能性がある」。在京特派員経験者はこう予測した。ポスト小泉の行方も絡んで、その心配がないとは言えないのが現状であろうか。

(クラブ企画委員)

平野 幸久 中部国際空港社長

2：1（水）昼食会 司会 宇治敏彦企画委員長 稲田好美委員 出席 68人

▼一〇〇点を指すな

「ユニークな経営と言われるが、別にユニークでなく、基本に忠実を心がけた」。淡々と話す平野社長。トヨタ自動車の「当たり前のことを当たり前にやる」の精神が伝わってくる。

中部国際空港「セントレア」は2月17日に開港1周年を迎えた。なにしろ「5年後に単年度黒字」との想定が、初年度で黒字化する見込みという。その経営とは何か。

同空港実現のポイントは、97年6月の愛知万博の開催決定と第2次緊急国民経済対策だという。2005年3月の愛知万博開催に、開港が間に合わなければならない。そのリーダーとして



平野氏が指名された。空港会社は98年5月に設立され、2000年の着工から5年で離

陸するというタイトなスケジュールをどうこなすか。

同空港は国際線と国内線の一体構造で、「乗り継ぎ便利」がうたい文句。開港半年前に完成させる手は何か。

さまざまな工夫やアイデアが出され、実施に移された。最大の課題が工期短縮。そのために考え出されたのが空港島の造成、ターミナルビル建設などの各種工事を同時進行で行うことだった。「逆算日程との重ね合わせ方式」で無駄を省いた。ターミナルビルも設計変更した。

それが当初の事業費7680億円を5950億円で完成させるという快挙につながった。「100点を目指しては間に合わない。50、60点でも進める」とし、関係者全員の気持ちを一つにした。「初年度黒字は社員全員による成果」となった。

2年目は万博効果がない。空港に溢れかえった地元民も開港時ほどではない。平野社長の実績と新たな挑戦が今後、続々と生まれる地方空港に伝授され、日本の空港の競争力アップにつながることを期待したい。

日刊工業新聞論説委員長

柏木 慶永

第5回アジア取材団

△参加者▽ 若宮啓文朝日新聞論説

主幹（団長）▽清宮克良毎日新聞政治部副部長（副団長）▽上村武志読売新聞論説副委員長（同）▽西川孝純共同通信論説副委員長（同）▽影山日出夫NHK解説主幹（同）▽安藤俊裕日本経済新聞論説副主幹兼編集委員▽千野境子産経新聞論説委員長▽小林一博東京新聞論説主幹▽大塚清一郎新潟日報報道部遊軍キャップ▽山本雅章京都新聞ニュース編集部部長代理▽壺倉真司山陰中央新報報道部記者▽濱元克年沖縄タイムス北部支社編集部長▽田中龍男東京放送報道局担当局長▽柏谷賢之日本テレビ報道局政治部長▽山本之聞フジテレビ報道局解説委員長▽川村晃司テレビ朝日報道企画部コメンテーター▽持永秀樹テレビ東京報道局次長兼報道番組部長▽永野景子文化放送編成局報道制作部主幹▽岩崎玄道クラブ専務理事▽石川洋クラブ総務部長

△日程▽（5泊6日） 2月12日（日）

昼羽田発 夕刻ソウル着▽大島正太郎駐韓大使主催懇談会（公邸） 13日（月）▽朴槿恵（パク・クネ）ハシナラ党代表会見（国会内）▽韓国

言論人との交流会（コリア・プレスセンター） 14日（火）▽李明博（イ・ミョンバク）ソウル市長会見（ソウル市庁）▽崔相龍（チェ・サンヨン）元駐日大使（高麗大教授）・朴哲熙（パク・チョルヒ）ソウル大教授昼食会（ロッテホテル内）▽潘基文（パン・ギムン）外交通商相会見（外交通商省）▽金蒼浩（キム・チヤンホ）国政弘報処長主催歓迎会（コリアハウス） 15日（水）▽サムスン人力開発院視察（龍仁）▽ウリ党議長候補の合同演説会取材（全州フアーシヤン体育館）▽鄭東泳（チョン・ドンヨン）前統一相会見（全州代表取材）▽金種泰（キム・グンテ）前保健福祉相会見（同） 16日（木）▽ボスコ視察（浦項）▽慶州・仏国寺見学▽現代（ヒュンダイ）自動車工場視察（蔚山） 17日（金） 昼成田着

新潟の大塚記者は拉致報道で協会賞を受けたチームの一人だった。山陰の壺倉記者は竹島の連載を手がけ、平壤取材の経験も。沖タイの濱元記者は日米防衛分担や靖国がらみでの関心だったかもしれない。京都の山本記者はサムスン、ボスコ、現代の取材で「韓国トップ企業のいま」という企画を構想した。文化放送の永野記者は現地から携帯リポートを数回。お疲れさまでした。（玄）

高山 勇一 現代文化研究所中国研究室長

2・1(水)「中国经济」⑦ 司会
藤村幸義委員 出席 76人



▼世界第3位の中国自動車市場

中国の自動車販売は昨年で572万台と世界第3位。今年は日本を抜き米国に次ぐ世界2番目の市場となることが確実視されている。高山氏は世界の自動車産業に精通しており、その客観的な分析はこれから現地で取材する立場の私には深い示唆を与えるものだった。

中国の沿岸部ではマイカーが普及してきたが、その一因として高山氏は、民族系メーカーが小型車市場に参入してきた点を指摘する。3年前まで市場の1割に満たなかったシェアは、昨年ほぼ4分の1を占めるようになり、排気量1000cc前後では外資系を圧倒している。

一方、外資系は合併形態でなければ生産できないため、以前はいち早く進出した独フォルクスワーゲンの

独壇場だった。しかし2000年以降、米ゼネラル・モーターズやホンダが台頭、韓国の現代自動車やトヨタ自動車も本腰を入れて始めており、世界の主要メーカーが集まる主戦場となっている。

ただ高山氏は「品質基準の違いで外資は民族系との価格差を埋められない」と指摘、外資系の高級車と民族系の大衆車という市場の二極化が当面続くことを見る。多くの消費者は品質が劣っても安いものを求めるため、この「ダブルスタンダード」はかつて存在した外国人用の外貨兌換券と中国人用の人民元を彷彿させる。このため2010年初頭には1000万台市場まで成長するだろうとしながら「外資が戦える余地は限られている」との見方は興味深かった。

課題はエネルギーと環境問題だ。中国政府も燃料電池車など環境技術の開発に力を入れるが、高山氏は「先進技術を取り入れる受け皿が中国企業にはない」と手厳しい。先進国のコピーで発展したと揶揄された中国産業も、本当の実力が問われる段階にきたようだ。

東京新聞外報部

新貝 憲弘

永守 重信 日本電産社長

2・3(金) 記者会見
司会 岡田晃委員 出席 76人



▼救済型のM&A論

1973年、28歳の時に仲間4人と日本電産を立ち上げた。以来、「情熱、熱意、

執念」で、売上高5千億円の企業グループを育て上げた。84年に買収してきたM&Aのプロである。その多くは救済型のM&A。「葬儀屋さんもお坊さんも待っているようなつぶれかかった会社に、丁寧に頭を低くして、お金をたくさん持っていった、再建をやらせてもらう」方式だ。

再建の方法は「内科療法」。人員削減や事業を切り売りする手法とは一線を画す。従業員の雇用を保証したうえで、労働時間を延ばし、「遅れず、休まず」働いてもらい労務コストを引き下げる。1円以上の出費はすべて社長決裁にして出費を抑え、徹底的に購買コストを引き下げ

る。社員には整理、整頓、清潔、清掃、作法、しつこく徹底し、業務効率を高める環境を整えていく。

社員の意識を変えながら、永守流経営の考え方を理解してもらえる土壌を整える。事業所を訪れるたびに、社員とお弁当をつつきながらの懇談会を開き、幹部社員は会食に連れ出す。永守氏いうところの「餌付け」の費用はポケットマネー。「会社のお金でございそうしてもらってもありがたみがない」からだ。

永守氏が今実現したがっているのが「健全な和製TOB」。会見でも「日本で第一号をやるうと準備していた」と打ち明けた。しかし、ライブドアによるニッポン放送の敵対的買収騒動などで、断念した。

「今はマイナスが70、プラスは30しかない」悪い例が続き、こころ、2年チャンスが来るとは思えない」とみる。和製TOBができれば日本電産も売上高2兆円、3兆円がみえてくる。今は非効率なことをやっていると。小気味よく明快な話の裏に、経営者としての苦悩がすけてみえた。日本経済新聞産業部次長 大村芳徳

清水 真人 日本経済新聞経済解説部編集委員

2・6(月)「著者と語る」(1)
司会 川戸恵子委員 出席 78人

▼政策決定メカニズムの変化

小泉純一郎首相の「強さ」の秘密は何か——その回答の一つが著書のタイトルでもある「官邸主導」にある。この10数年間の、「政策決定メカニズム」の変化を、豊富な取材と明確な分析によって描き出すことに成功している。

ズバリ結論は、「権力」が政党、派閥、族議員、官僚から、徐々に、しかし劇的に首相官邸に移ったということだろう。

著者の話も説得力のあるものだったが、「本場にそうだろうか」「仮にそうだったとしても、ポスト小泉以降は逆戻りするのではないか」などの疑念の声も聞かれた。



5年半の長期政権を誇ることになる。「大勲位」と、

「変人」「一匹オオカミ」では、イメージにギャップがあり過ぎるのかもしれない。

それでも小選挙区制の導入を軸とする政治改革の進展によって、派閥や族議員の力は信じがたいスピードで凋落し、党、官僚の政策決定権が首相官邸に奪われてきた。

キーワードは、小泉首相が陣笠時代から執着してきた「権力の行使」(解散権と人事権)に尽きる。

著者は政策決定権の変化を追うことで、そのことを浮き彫りにした。

私であれば、ドロドロとした権力闘争にスポットライトをあてたかもしれない。まずは実力者、野中広務元幹事長との凄絶な闘いであり、その延長線上に最大派閥「旧経世会」支配を崩す野望があった。

そして中曽根康弘、宮沢喜一、橋本龍太郎各首相を政界引退に追い込んだ。その集大成が「郵政解散」だったと見て間違いない。

アプローチはさまざまあるが、おそらく同じ結論に導かれるだろう。歴史の評価はまた別である。

毎日新聞特別編集委員

岸井 成格

草野 厚 慶応大学教授

2・7(火) 記者会見 司会 宮田一雄委員
出席 56人

▼国際協力銀行存続論を一刀両断

政府開発援助一元化の議論が煮詰まってきた中で、草野教授による国際協力銀行(JBIC)存続論への厳しい批判は「一刀両断」の印象の強い歯切れのよさを示していた。

政府系金融機関の民営化・統合の最後の課題だけに、議論は生臭くなくて妥協案や先送り型の議論になりやすい。草野氏は、主に3つの観点からその解体論を激しく展開した。

主張の第一は、輸銀と基金が統合されたJBICそのものには、政府の特殊法人改革の趣旨から考えてリストラ効果はなく、2つの組織が見かけだけ一緒になってまったく別の仕事をしているだけだ。第二に、先進国やOECDの基準を見てもODA貸付(円借款)と輸出信用は明白に分離している。日本の現状は途上国型だ。



第三に、日本の現状は「透明性の維持・確保」という政

策遂行上きわめて重要な原則をも損なっている、などの多角的な指摘であった。

草野氏自身は外務省のODA戦略会議のメンバーであるとともに、内閣官房長官の下に設けられた「海外経済協力に関する検討会」のヒアリングにも応じるという具合に、いわば「渦中の人」である。それだけに、JBIC内部や財務省の水面下の動きや、公表資料の一見わかりにくい危うさ(つまり、引っかけやすいゴマカシ部分?という意味)の具体的な指摘なども注目された。さらに、マスメディアの一部のニュースソースに振り回されているとして「勉強不足」を指摘する場面もあり、内容は盛りだくさんであった。

個人の関心は、草野氏が強調する「財務省の執拗なまでの存続への努力」がなぜ続いているのか、という点にあったが、草野氏の答えは私にとつて納得できるものだった。配布された「JBIC保有不動産」の表を含む資料の充実ぶりや合わせて、レクテーマに一層強い関心を持つことにはなった。

個人会員(日経出身) 宮智 宗七

黒田 東彦 アジア開発銀行総裁

2・8(水) 昼食会 司会 橋本達明理事
岡田晃委員 通訳 池田薫 富永恵子
出席 99人

▼単一の東アジアFTAを提唱

昨年2月にアジア開発銀行(ADB、本部・マニラ)の総裁に就任してから1年が経過した。アジア各地や欧米などを飛び回る多忙な日々の合間に来日し、会見していただいた。アジアの地域協力や経済統合の役割に関する大胆な発言は印象的だった。

「アジアに存在する多数の自由貿易協定(FTA)を単一の東アジアFTAに統合していくことが重要課題だ」「東アジアは北米のNAFTA型の浅い統合より、ヨーロッパ型の奥行き深い経済統合を目指すべきで、その方向に向かっていくだろう」

財務省の国際金融畑を歩み、財務官当時は通貨マフィアとして活躍し、内閣官房参与なども務めた論客で知られる。しかし、従来以上に明快な言いぶりには、アジアが繁栄する道を提案していく自負がうかがえた。アメリカ、中国、韓国などがFT



A推進に力を入れているが、日本のFTA戦略はやや後手を踏んでいる。総裁は「貧困なきアジア地域を実現するためには、地域統合が重要な手段になる。開かれた地域主義の方向は間違いない。地域が協調し、統合が進むと、経済成長が促進され、投資を呼び込む。新たな経済的機会が創出される」と述べた。

「政冷経熱」の中日

関係や、FTA交渉が中断している日韓関係を考えると、前途は多難かもしれない。だが、「単一の東アジアFTA」提唱は強烈なメッセージになった。ADBが指標として開発中の通貨単位(ACU=アキュ)について

ても、「アキュを出す時期は明確に言えないが、将来の共通通貨の素地になり得る」と断言し、注目を集めた。

昼食会翌日にはアメリカに向かった。アジアの経済発展を目指し、チャレンジする姿勢が続きそうだ。

読売新聞経済部次長 野坂 雅一

松原 聡

通信・放送の在り方に
関する懇談会座長

2・9(木) 記者会見 司会
和田圭委員 出席 236人

▼産業論だけでよいのか

いわゆる「竹中懇」の座長。今やテレビ関係者が最も注視している人物の一人だ。会場には200人以上が出席したが、この規模は「首相クラス」という。



風貌もテレビ的?で口調もソフトだが、竹中総務相の私的懇談会の座長だけあって、発言は、それなりに大胆だ。

松原氏が目指すのは「放送と通信のビッグバン」。護送船団方式でやってきた金融の世界の変革になぞらえてみせた。技術が進歩し、放送と通信の垣根が低くなっていく今、それぞれ異なる規制やルールが課されているのは無意味ではないかという。

確かに、テレビをめぐる変化は確実におきている。パソコン画面の横隅にテレビ画面を立ち上げ、メールの合間に面白そうな映像が流れれば、「全画面表示」に切り替えて見る。インターネット上で動画ニュースをダウンロードし、自分の都合の良い時間に見る。街角で、待ち合わせの

合間に携帯電話で「ワンセグ」を見て、お笑い番組で時間をつぶす…。

テレビは「お茶の間」で一家そろって見るものとは限らなくなってきた。各社が乗り出しているインターネット上の映像配信サービスについても「ユーザーの視点から考えると、著作権の問題で

見たいものが見られない。50万といわれるコンテンツがネットに流れれば、大きなビジネスチャンスとなる。見損ねたドラマがすぐ見られるようにすれば、ビジネスになる」と経済利益を主張する。

6月までに報告書をまとめることだが、「官僚の作文はない。着地点もなく、シナリオもない」という。

「放送と通信の融合」は避けられない時代の流れではあるが、「産業の視点」のみでとらえてよいのか。出席者からも指摘が出たが、放送の「公共性」や、幅広い文化・ジャーナリズムの担い手としての役割にも十分目を向けて、議論を進めてほしい。日本テレビ報道局長

足立 久男

大野 元裕 中東調査会上席研究員

2・13月研究会「中東ベシック」
司会 中井康朗委員 出席 90人

▼米のもくろみにノ

迷走が続くイラクの新政府づくりをどう読み解くか。新憲法に基づく今回の選挙で最大かつ唯一の争点は「宗派・民族というマグマ」だったとみる。米国が望んでいた世俗派主体の政権づくりに対して、イラク国民が突きつけた答えはノーだった。

宗派・民族を超えた国民融和を目指したシーア世俗派のアラウイ元首相が率いるイラクリストは議席を大幅に減らして惨敗。かつて米国との蜜月を誇ったチャラビ氏率いるイラク国民会議は1議席もとれなかった。

宗派・民族が混在するイラクにはもともと分離・分裂に向けた「遠心力」がある。それを独裁によって封じ込めてきたのが旧フセイン政権だ



った。独裁を除去すれば、民主主義が花開くという米ブッシュ政権の主張がいかに実態とかけ離れて

いたかはあらためて言うまでもない。

今回の選挙では、昨年1月の選挙で大半がボイコットしたスンニ派が加わった。大野氏は「政治への参加、不参加がイラクの安定の度合いを占う一つのバロメーター」とみて、スンニ派を含めて78%という高い投票率に達した今回の選挙に一定の評価を与える。

ただ、人口比率で少数派のスンニ派が政治参加によって得られる利益は限られている。「民主主義が多数決の顔を持っているとすれば、分母が小さい人は必ず負けてしまう」からだ。だとすれば、スンニ派の不満は今後もくすぶり続けることになる。「政治プロセスが進めば、治安も安定する」(ブッシュ米大統領)という保証はない。

連立政権づくりに向けた方程式でも個々の政党の利益配分がカギになっている。「連立政権ができたとしてもこれは野合にすぎない」(大野氏)とすれば、新政権が資源の権争いや憲法修正をめぐる衝突、分裂するのは時間の問題だろう。

朝日新聞外報部

石合 力

ジヨゼフ・キャロン 駐日カナダ大使

2・15(水) 囲む会 司会 春名幹男委員 通訳 長井鞠子 出席 62人

▼知日派大使の「共同体」分析

「1975年に初来日した当時：流行歌は『泳げたいやきくん』でした。なめらかな日本語でスピーチを始める、聴衆も笑って、なごんだ。

昨年12月に着任したキャロン駐日カナダ大使の日本記者クラブ・デビュー。「居酒屋でたまたま隣り合わせたサラリーマンの方々の会話も楽しみにしています」。

ソフトタッチで始まった講演が徐々に本題に入ると、居酒屋のサラリーマン風笑顔から、老練な外交官の顔つきに変わった。

本題は、12月にクアラルンプールで初の「東アジア首脳会議」が開かれたのを受け、アジア太平洋地域の「共同体」形成の現状を分析し、将



来を探るものだった。

「アジア共同体を築くことは前途多難である」と断じた。明治以来、「アジア志向と西洋志向」の均衡をとってきた日本は、あいまいな「アジアのアイデンティティー」だけに基づくようなアジア共同体構想は受け入れられないはずだ、と分析する。

現在、アジア太平洋地域では①東南アジア諸国連合(ASEAN)主導で、日米中などが幅広く加わる「政治共同体」、②アジア太平洋経済協力会議(APEC)を軸に動く経済共同体、③日韓豪などが米国と2カ国取り決めを結んでつくる安全保障共同体―が「効果的」に「調和を保つて」機能している、というのが大使の見立てだ。日加両国の未来は、その中で国益を追求していくことにある、という結論だとお聞きした。

これまで3度、計15年の駐日歴を持つ。今回の駐在で四国88カ所巡りの残り29を終えるのも目標。「弘法大師はどこか(中世の神学者)トマス・アケイナスに似通う」という。文人大使でもある。

共同通信編集委員

会田 弘継

厳善平 桃山学院大学教授

▼改革・開放路線の「影」「四農」

高度経済成長を続ける巨大国家・中国が、四農問題に苦悶の表情を浮かべている。四農問題とは、農業、農村、農民、そして農民工をめぐる四つの問題。安徽省出身の経済学者、厳善平教授は、緻密な人口移動分析、農村の実態調査などを基に、1978年以来進められてきた改革・開放政策の「影」に鋭いメスを入れた。

厳教授によると、近年の中国では、三農問題（農業の豊作貧乏と食糧生産の不安定）「農民の貧困、特に少数民族農民の絶対的貧困」「農村における公共サービスへ医療、教育Vの供給不足」に加えて、「農民工」（内陸農村を中心に沿海地域や都市部に移動し低賃金で働く出稼ぎ者）の問題が深刻化している。

これら四農問題の背景にあるのは、農業搾取、農民差別、農村軽視の開発戦略。特に、低賃金・重労働の下層労働者として「世界の工場・中国」を支える、1億数千万人の農民工問題は、毛沢東時代の歴史的背景、制度的要因に起因しており、胡・温体制下最大の政治問題となりつつある。

2・17（金）研究会「中国経済」⑧
司会 藤村幸義委員 出席 11人



改革・開放路線の「影」の部分として、最近、とみに目立ち始めた農民工問題。その本

質部分として厳教授が指摘したのは①事実上の身分制度である戸籍制度と、就業及び医療・年金などで「二等国民」扱いはする差別的行政制度による「都市・農村の二重構造」②憲法で移住・職業選択の自由が規定されておらず、全人代の代表選挙の投票で受けている農民の政治的権利制限の2点。今後、中国が高度成長を持続するには、これら旧来の諸政策を転換させ、四農問題を解決していくことが不可欠、と締めくくった。

最高実力者、鄧小平が南方視察で、改革・開放の加速化を指示してから14年。経済市場としての魅力に目を奪われがちだったメディアにも、深い実態分析と実証に基づく中国報道が求められる。

時事通信編集局総務兼解説委員

鈴木 美勝

野口 千歳 ケア・インターナショナル ジャパン事務局長

▼生きる力 信じて支える

「スマトラ沖地震津波の被災地の復興には、10年以上の年月がかかるでしょう」と野口さんは語り始めた。

2004年12月に起きたスマトラ沖地震のマグニチュードは9・0で、地球上で100年の間に2、3回しか起きない規模の超巨大地震だった。この地震による大津波はインド洋沿岸一帯に広がり、23万人以上の犠牲者を出した。

野口さんが日本支部の事務局長を務める国際協力NGO「CARE」は、60年の歴史をもち、アジアやアフリカなど70カ国以上の国で活動している。

地震が起きたとき、たまたまスリランカで活動していた野口さんは、何枚ものスライドを使って、大災害に翻弄された住民のその時とその後を語った。「海辺

の村の中には、95%の住民が亡くなったところがあった」と大津波の怖さを語り、「道や橋が壊れたなかで



NHK解説委員 山崎 登

物資を届けるには時間がかかる。しかも、ただ物をポンと置いただけでは、高齢者や子どもの手に渡らないのです」と、被災者の支援には細やかさが必要だと話した。実践に裏づけられたエピソードには説得力があった。

そして、「大事なことは、被災者一人ひとりの話を聞くことを通じて、それぞれの被災者が災害に立ち向かう思いや能力を高めていき、自分たちの力で災害を乗り越えていけるようにすることだ」「それを支えるのが本当の意味の支援だ」と思う」と熱っぽく語った。

「災害直後には多くのマスコミが現地に入ったが、時間とともに少なくなってしまう。被災地の復興は決して進んでいるわけではないので、継続的に取材してほしい」と飽きやすいメディアに対する注文とともに「厳しい目で見てもらうことで、NGOは育つと思う」と自らへの戒めも忘れなかった。

恒例のゲストブックに、野口さんは自らの信念として、この文章のタイトルを記した。

2・21（火）記者会見「被災地から」
⑤ 司会 菅沼堅吾委員 出席 22人



フランク・シュタインマイヤー ドイツ外相

2・21(火) 記者会見 司会 宮田謙一
委員 通訳 桑折千恵子 蔵原順子
出席 157人

▼G4案への再参加求める

シュレーダー前首相の懐刀として政権中枢を仕切りながらも、存在感のある前首相や前外相の間で目立たなかったのが就任当時のイメージだった。だが今やイラクのドイツ人拉致事件やイランの核開発問題で、ドイツでは連日メディアに登場し、注目の人である。訪日には約20人のドイツ人記者団が同行した。

シュタインマイヤー外相はイラン核問題で精力的に動き、ロシアや中国を巻き込んだ包囲網作りに一役買った。先日ミュンヘンで行われた安全保障会議では、世界の安全保障にロシアの協力がいかに重要かについて熱弁をふるった。外相の外交論は明確だ。多国間外交を基本に据え、

欧州連合(EU)や北大西洋条約機構(NATO)内の協力関係を高め、

さらにそうした枠組みにロシア、中国を招き入れる。自国の安全保障は、周辺国の安全保障であり、さらに世界の安全保障を組み立てていくという広がりのある考え方だ。

だが今回、外交について多くは語らず「21世紀の日独関係、新たな課題に向けたパートナーシップ」と題して会見した。税制改革や少子高齢化など日独に共通する課題は多く、日本と手を携えたいという。外交論は一カ所だけ登場した。ドイツなど3カ国が日本抜きで再提案した国連安保理改革に関する「G4案」の一件についてである。

外相はG4案を「最も現実的なアプローチ」と言い、日本に再参加を求めた。だが、会見に続く会談で日本側は要請をあらためて拒否した。最近のドイツ誌インタビューで、自らの目標をドイツ統一に貢献したゲンシャール元外相であるとし、平和外交のためなら激務をいとわないと言いつつこの人物。日本はどう付き合っているだろうか。

毎日新聞外信部 小谷 守彦

橋本 元一 NHK会長

2・22(水) 昼食会 司会 滝鼻卓雄
理事長 川戸恵子委員 出席 151人

▼デジタル時代の公共性を追求



NHKは今、各界を巻き込んだ改革論の渦中にある。放送業界全体も放送と通信の融

合をめくり、大きく揺れる。そんな中で登場した当事者のトップは、公共放送の使命や今後の在り方を中心に持論を展開した。

まず橋本会長は、一連の不祥事に対する批判から急増した受信料の不払い件数が、このところ減少に転じ、落ち着いてきた状況を強調。「できただけ早い信頼回復、財政安定に向け、努力を続けたい」と語った。

その具体的な方策が1月24日に発表された、新年度からの「3か年経営計画」だ。NHK自身の改革と、デジタル時代への対応を2本柱に、様々な施策を打ち出した。橋本会長は「社会的変化に合わせて自分たちが

ら脱皮していくことが必要な一方、変えてはいけない部分もある」と主張し、それが「NHKの公共性や視聴者第一主義、自主・自立のジャーナリズム精神だ」と述べた。

これらを踏まえ、デジタル時代の公共放送に求められる要素を4つ提示。①信頼される情報の提供②人々が物事を考える際の共通基盤の形成③情報格差の是正と情報弱者の支援④日本固有の風土・文化の維持・継承——が大切だとした。

現在の放送改革論議は、市場原理の導入や著作権問題の解消など、経済界ベースで進みがちで、ビジネス環境整備のみが先走っている感がある。これに対して橋本会長は、「日本文化の基調には多様性があり、公共放送も複雑で有機的なつながりを持つ点に意義がある。単純に経済合理性だけで考えるのは忍びない」と疑問を呈し、和辻哲郎の思想にも言及して反論したのが興味深かった。

会場との質疑応答では、国際放送への広告導入や放送技術研究所の民営化など、直近の焦点も取り上げられ、時宜にかなったゲストとなった。

読売新聞文化部 宮下 博

池田 明史 東洋英和女学院大教授
中島 勇 中東調査会上席研究員

2・23(本)研究会「中東ベールシヅク」
司会 脇祐三委員 出席 68人

▼ハマスは「モーニングおじさん」

「ハマスは中東版モーニングおじさん」。パレスチナ、イスラエル事情を比喻や逸話を交えて一刀両断、時に会場の笑いをさそった。

シャロン・イスラエル首相の緊急入院(1月4日)、パレスチナ評議会選挙でのイスラム

原理主義組織ハマスの圧勝(同25日)を受けての時宜を得た研究会となった。

例え話満載の中島節と鋭利な池田分析が炸裂した。スタイルこそ違いが、「だらしないパレスチナ解放機構(PLO)主流派ファタハよりも、統制力あるハマスの方がまし」との基本認識では共通している。

冒頭の「モーニングおじさん」はとらえどころのないハマスの実態を、一部メンバーが「ユニット」として活動する女性歌手グループ「モーニング娘。」になぞらえた「コマだ。今後は?」(ハマスとファタハの



2大政党制に移行できそうな気配(中島氏右)、「パレスチナ他組織の部隊を統制できるかハマスの真価が試される」(池田氏左)。3月のイスラエル総選挙とパレスチナ自治政府組閣が次の焦点だ。

米国はハマスに「テロ組織」のレッテルを張り、「中東和平の審判役を忘れて時にゲームに口を出す」(中島氏)。

アラブ・イスラム世界の良き理解者であったはずの欧州も「昨年7月のロンドン・テロや今年初めのイスラム教預言者ムハンマド風刺画問題で被包囲意識を強めている」(池田氏)。両氏は欧米流の「ハマス=悪」の図式とは

一線を画し、ハマスとイスラエル中道政党カディマとの間で「暗黙のルールに基づく安定」が成立する可能性を指摘、日本の中東研究の水準の高さを体感させてくれた。

中東和平で日本が果たすべき役割を考えさせられる研究会だった。毎日新聞外信部副部長 福島 良典

平松 庚三 ライブドア社長

2・24(金) 記者会見 司会 矢高誠司委員 出席 223人



▼暴走した息子への叱責と決意

経済事件史に残るスキャンダルを起こしたライブドアのトップに、子

会社社長から急きょ登板して1カ月。前々日には堀江貴文容疑者の後任の代表取締役も逮捕され、「取締役不足」の異常事態に陥った。それでも「ブルペンで一球も投げないうちにマウンドに上がり、やっとな肩が温まった。再建してやろうという意欲がふつふつとわいてきている」と全力投球を宣言した。

ライブドアを売り上げ780億円の大企業に押し上げた前経営陣の「時価総額世界一」主義。それを「経営のすべての目線が株価に集中しすぎて株価至上主義に傾斜してしまっ

の見る目に気づかなかった」と切り捨て、「堀江はこれだけの混乱を社会に起こした。戻ってくることはない」と言い切った。

暴走した息子をしかる、そんな口調も交じった。「世界一の企業」を合言葉に若者たちがひたすら走ってつくりあげた会社。走るのに一生懸命だった。「未熟者。大ばかやろうと言ってもいいのかもしれない」。

60歳の新社長は、27歳年下の前社長が築いたライブドアを「仕事に勢いがある。全員が経営者目線で仕事をしているのは素晴らしい」と褒めていた。裏切られた、でも突き放せない、との思いがあるのだろう。

企業風土の改革は進みそうだが、経営環境は日を追うごとに厳しくなっている。メディア、ファイナンス、ビジネス・ソリューションの3分野を事業の柱にしていく、と表明したものの、具体策は説明できなかった。上場廃止は確定的。株主から巨額の損害賠償を求められる可能性もある。恒例の揮毫は英語で「チャレンジ」。ライブドア再生はまさに途方もない挑戦となりそうだ。

朝日新聞経済部 織田 一

小島 朋之 慶応大学総合政策学部長

27日 研究会「東アジア共同体」
 ⑨ 司会 春名幹男委員 出席 68人

▼日中関係と共同体構想

とかく二国間の問題として語られがちな日中関係を、東アジアの地域協力と東アジア共同体という空間的に広く、時間的にも長い場に据えてとらえ返した。

昨年12月に開かれた東アジア・サミットはクアラルンプール宣言で「東アジア共同体形成を促進する」とうたった。

経済・安全保障など各分野から見れば、その核心となるのは日本と中国（近い将来、インドも加わるだろう）とされる。ただ、その東アジア共同体（中国語では「東亜共同体」）について、日本と中国の立場・姿勢には違いがあるという。たとえば、



加盟国に
 関して、
 拡大する
 か（日
 本）、限
 定するか
 （中国）
 であり、
 中国の議
 論は「合

作（協力）に力点を置いて「共同体」からは退き始めているとのこと。

さて、日中関係は昨年、「正常化以来最悪」とも評された。流行語になった「政冷経熱」も今では「政冷経涼」といわれる状況だ。

今後の改善を考える手がかりとなる「変数」として挙げられたのが相互補完関係の定着した経済関係をはじめ、国民感情・地域協力・歴史問題・台湾問題・安全保障⇨資源エネルギー問題の6テーマ。

歴史問題については、中国側でも抗日戦争中の国民党軍の役割が再評価され始めている。昨年、日中外相会談で合意した歴史的事実の共同研究などにより歴史問題は「小さくなくてゆく可能性がある」という。

小島氏は中国の成都、瀋陽で20年来、環境調査・植林などに取り組んできた。それを記念し、瀋陽の植林現場に中国側が小島氏の名前を含めて築いた「中日友好林」記念碑が昨年4月、「反日」ムード高揚の中で壊されてしまった。

「でも、その記念碑を蘇えらせませす」。キツパリした口調だった。個人会員（読売新聞出身）丹藤 佳紀

フィンランド・ナイト (2・10)



右から宇治企画委員長、岩崎専務理事、ユリオン大使

岩崎専務理事も参加して懇談した。

映画は3人の日本人女性ヘルシンキで日本食堂経営に奮闘するストーリーで、フィンランド人が「おにぎり」を楽しむというものだった。企画にあたり、レセプションにおにぎりを出すというアイデアもあったが、フィンランド直輸入のウォッカとビールにおにぎりは合わないというわけで却下。結局、サーモンのマリネなどのお国料理に落ち着いたが、実現していたらみんなが「おにぎり」をほおばる「画期的レセプション」になっていたかも!?

(春海)

○囲碁の会 ● (2・25)

1月をお休みにしたため、今回が今年最初の例会でした。この間、長く世話役を務めてきた村上重美さんが1月5日に、常連だった都留重人さんが2月5日に、相次いで亡くなられました。年齢や棋力は違っても、どちらもクラブの碁会には欠かせない貴重な存在でした。ご冥福をお祈

りします。

対局の方は22人が参加。江口浩会員が4連勝、堀川敏雄、相川誠一両会員が3連勝、箱崎道朗、田中信義の両会員が3勝1敗と好成績を上げました。総対局数は37局でした。今回は3月18日(土)午後1時から宴会場で開催します。初めての方も大歓迎です。ふるってご参加ください。

(河野)

“不完全燃焼”

亡命中の金炯旭インタビュ



高島 肇久

30年近くも経っているのだが、今なお腑に落ちないことが多い話がある。1977年2月のワシントン。

当時ナショナル・プレス・ビル9階のNHKワシントン支局に勤務していた私は、同じ階にある韓国人ジャーナリスト・文明子記者のオフィスをしばしば訪ねて話し込んでいた。

そんなある日、文さんが「韓国中央情報部（KCIA）の金炯旭元部長がニューヨークの郊外に住んでいるらしい。行って見ないか？」と言いだした。KCIAと言えば金大中事件があるし、対米議会工作の코리아ゲートもある。早速、車を飛ばしてニュージャージー州の高級住宅街に行き、それらしい家を見つけて張り込んだ。

あたりは一面の雪。寒さに震えながら待ち続けた。2時間余。ついに

中から中年の韓国女性が出てきて「夫は今フロリダにいる。連絡先を置いていけば電話させる」という。半信半疑ながら他に方法もなく、メモを残してワシントンに引きあげた。

それから何回かの長距離ドライブの後、ついに6月7日、金炯旭氏本人が玄関先に姿を現し、その2日後にテレビインタビューが実現した。

ワシントンの同僚、桑原惺カメラマンと二人で初めて金氏の家に入って度肝を抜かれた。コロニアル風のどっしりした家の内部は奥行きが深くて見るからに豪華。足を踏み入れると絨毯はフカフカで靴底が埋まってしまう。広々としたリビングルームの一角に三脚を立てて撮影の準備を始めたのだが、カメラの向きを見た金氏が「駄目。駄目。そっちは撮

らないで」と言う。そこには貴重な骨董品とおぼしき青磁、白磁の壺や皿がぎっしりと並ぶ大きな飾り棚があった。周囲を見回すと、一見して高価とわかる品々が部屋の至る所にある。ドアの取っ手は金色に光り、家具はフランスのアンティーク風でどれも見事だ。ようやく無難な場所が見つかり撮影が始まった。

日本のマスコミはまだ誰もこの人物に会っていない。真相を肉声で聞ければ大特ダネだ。と気負いこんで質問を始めたのだが、流暢な日本語で最初に返ってきた答えに出鼻をくじかれた。

「金大中事件？ 謎なんてないでしょう。文明子記者が書いたことは全部本当。付け加えることは何もない」文さんはすでにその年の2月、金炯旭氏との長時間のインタビューを

もとに事件の詳しい経緯を記事にまとめ、金氏自身が書いた事件関係者の名簿を付けて共同通信から世界に配信していた。それを追認するだけではニュースにならない。

あわてて金大中事件と当時の朴正熙大統領やKCIAとの関わりを中心に質問を繰り返し、ようやく「朴大統領が指示したかどうかは分からないが、KCIAの李厚洛部長が部下に命令したことは間違いない。金大中が殺されなかったのは、アメリカと日本が圧力をかけたことと、日本の飛行機が彼を運ぶ船の上を旋回して牽制したからだ。奴らがなぜこんな馬鹿なことをしたのか僕には分からない。想像に任せる」という答えを引き出した。とは言うものの内容に新味はなく、拍子抜けの感は免れない。

その代わりだろうか。金元部長は映像面では大変なサービス精神を発揮してくれた。自宅のトレーニングマシンで衰えを見せない体力をアピールし、書斎では間近に迫った議会証言に向けての準備風景を撮影させる。果ては愛犬を連れて近所の公園に行き、長時間のランニング。桑原カメラマンと私はエネルギーシユな金元部長に振り回されながら「この人は本当に政治亡命者だろうか」と顔を見合わせたほどだった。

その後3回この豪邸に通ってインタビューを行い、時には夫人の手料理をご馳走になるくらい親しい関係構築したが、残念ながら世間を驚かすような話を引き出すことは出来なかった。当時しきりに取り沙汰された日韓間の政治資金の流れについては何回も聞き質したのだが、いつも「今は無理だが、いずれ必ず話す」という約束だけで終わってしまった。

その後、金元部長は日本の他のマスコミにも登場するようになって私の縁は次第に間遠になったが、しばらくする内に妙な話が聞こえてきた。金元部長がヨーロッパからニューヨークの空港に着いたところで逮捕されたというのだ。何でもドルの札束を大量に身体に巻き付けて、よちよち歩きで税関を通り抜けようとしたため御用になってしまったらしい。金元部長の贅沢な暮らしのものは在任中に隠した2千万ドルの秘密資金だという噂は聞いていたが、空港での逮捕話を聞いた時には、「なるほど。こうやって金を運び込んでいたのか。それにしても、がっしりした体躯で、猪とか熊とあだ名されるほどの金元部長が、何万ドルもの紙幣を身体に隠してどこちなく歩く姿はどんなだっただろう」と想像し

たものだ。

その後何年もして耳にした次の情報は、金元部長がヨーロッパに金を取りに出かけたまま行方不明になり、殺されたかもしれないというものであった。真偽のほどは長い間分からなかったが、1999年になって文明子さんが「金元部長はソウルに連れて行かれ、殺された」という情報を伝え、さらに2005年5月にはKCIAの生まれ変わりである韓国国家情報院の「過去事件の真相究明委員会」が「金炯旭氏は79年9月頃パリにおびき出され、銃殺された。これを指示したのは当時の金戴圭中央情報部長であった」という調査結果を公表した。

この発表は当時のKCIAが朴大統領にとって目障りになった金元部長を抹殺したことを韓国の国家機関がはじめて認めたもので、大きな反響を呼んだ。このニュースは日本でも新聞の国際面で伝えられたが、その記事を目にして私は「やはり」と思う一方、もう一度金元部長に会って、いつか必ず話すと聞いていた日韓間の秘密政治資金の流れを聞き取ったし、何よりも韓国の現代史の謎の部分についてもいろいろ尋ねたかった、という口惜しい思いに駆られた。また、一時は朴大統領の

側近中の側近と言われ、KCIA部長として思うままに権力をふるい、莫大な額の蓄財もした人物が、結局は国を追われて最後は殺されてしまうという冷酷な結末に、当時の韓国社会の闇の深さを思い知らされた。

それにしても金元部長はなぜ、あの時にNHKのテレビ・インタビューに応じる気になったのだろう。文さんは、金炯旭氏はできれば朴大統領とよりを戻して、韓国への復帰を果たしたかったらしいと推理しているが、その一助になるとも考えたのだろうか。今となっては知るよしもないが、最近、韓国から過去の真相究明の話がたびたび伝えられるようになったため、改めて当時の記憶がよみがえり、不完全燃焼を悔やむ気持ちを感じるが多くなっている。

金炯旭インタビューではもう一つ忘れられない出来事がある。1977年6月22日。4回目のインタビューを行うため、前夜、ワシントンから支局の車でニュージャージー州フォートリーという町まで行き、街道沿いのモーターで数時間の仮眠を取った時のことだ。玄関前で明るい車の通りも多いからと、撮影機材や16ミリフィルムをトランクに残したまま部屋に入ったのがいけなかった。

早朝、車の所に行くところトランクの鍵の部分にポツカリと小さな穴があいている。人を呼ぶと「やられたね」の一言。木製の三脚だけを残して全ての機材が消えていた。

それからが大変だった。ニューヨークの同僚に代替機材を頼み、金元部長に「遅れる」と連絡。町の警察署に盗難届を出す一方、公衆電話から東京に盗難の報告を入れたのだが、その電話を受けた東京のカメラ機材担当デスクの言葉が秀逸であった。

「なにっ！盗まれた？ フィルムは撮影済みか？ インタビューはこれから？ いやあ。良かった。良かった。機材のことは心配しなくて良いから、面白い話をとれよ」

盗まれたフィルムが取材済みかどうかを真つ先に心配してくれるデスクの言葉くらい、事件で動転する私達を落ち着かせてくれるものはなかった。古き良き時代の話で終わらせたくない思い出である。

たかしま・はつひき会員 1940年生まれ 63年NHK入局 ワシントン特派員 ロンドン支局長 国際部長 90年「ニュース21」の編集長 兼アンカーマン その後、報道局長 解説委員長 特別主幹等を歴任 00年国連広報センター所長就任 02年から3年間外務報道官を務め 現在 外務省参与

社会部デスク日誌

同時多発的展開に総力戦

▼佐藤 敦

(東京新聞)

タイシンキョウドギソウ。耳慣れない言葉も、すっかり定着したようだ。昨年11月17日、国土交通省が公表した耐震偽装事件は、年末年始の企画や特集に向け、アクセルを踏み出していた社会部員たちの仕事を一変させた。それから3カ月余。堀江貴文元社長が逮捕されたライブドア事件、防衛施設庁の官製談合、東横インの不正改造と、次々に飛び込んでくる日替わりニュースに社会部は翻弄され続けた。

耐震偽装チーム立ち上げ

耐震偽装が公表されたころ私たちは三つの取材テーマを抱えていた。一つは戦後60年の通年企画として取り組んできた「記憶―社会部記者が受け継ぐ戦争」。もう一つは元旦にスタートする新しい通年企画「東京スピリット」。そして、政界への波及が焦点となった全国小売酒販組合中央会の業務上横領事件。

70人という在京紙としては小ぶりの所帯にとって、これ以上、事件を抱えるのは辛かった。だが震度5強の地震で倒壊する恐れのあるマンションやホテルが首都圏を中心に何棟も建てられていた未曾有の事態の前では、ためらう時間もない。

遊軍記者、都内版を担当する東京ニュース取材班や支局の若手たち、警視庁、警察庁、国土交通省、法務省の事件記者らを集め、専従チームをつくった。他の取材が滞るのは目をつむった。米びつの底をたたく思いで遊軍キャップも投入。証人喚問など国会の動きを追う一方、偽装マンション住民への取材、関係者への夜回りを続けた。

あの時期、だれも倒れなかったのは幸運だったとしか言いようがない。年の終わりに近づいたころ、捜査本部は全国百カ所以上の捜索に踏み切り、前後して、姉齒秀次元一級建築士らの事情聴取も始めた。

つかの間の正月休みが終わると、事件は再び、同時多発的な展開を始める。「早ければ今日、ライブドアにガサ(家宅捜索)が入ります」。東京地検特捜部を取材する司法クラブのキャップからそんなメールが届いたのは、連続幼女誘拐殺人事件の宮崎勤被告への最高裁判決を次の日に控えた1月16日未明だ。

特捜部がライブドアを捜査しているという報告が現場からあったのは前年秋。堀江社長は「時の人」だ。大事件になると思いながら耐震偽装に気を取られ、まだ先のことと思込んでいたのはうかつだった。

急視、ライブドア取材班へ

夜になって特捜部は、六本木のライブドア本社、堀江元社長宅などを証券取引法違反容疑で捜索する。翌日、酒販組合事件の取材を続けてきたチームは「ライブドア取材班」に看板を替えた。取材結果を形にできないまま、別の事件に転進するのは辛いことだったと思う。

捜査から一週間後の23日には堀江元社長ら4人が逮捕され、その一週間後には防衛施設庁の談合で技術審議官ら3人が特捜部に逮捕された。この間、東横インで身障者用駐車場などが不正改造された問題も発覚し

ている。2月に入ると紀子さま「第3子」ご懐妊のニュースも。このころ、どのような順番で事件が起きたかを手帳を見ずに暗唱できる記者は少ないだろう。

社会部にいていつも思うのは、ニュースが消費されるスピードが速すぎるということだ。事件は時代の病理の現れであり、病巣からの警鐘だからこそ、社会部の記者たちはその背景を探り、伝えようとする。その営みを通じて、私たちの社会がどこに向かっているのかを見つめるのであれば、事件は個々の不幸や不正の集積にすぎなくなる。

昨年末から集中したいくつもの事件は、社会の隅々にまで「欲望」とか「本音」が行き渡り、それが尊ばれ、大切なものが失われていくことを象徴する出来事のように思えてならない。もどかしいのはニュースの渦中において、私たちが失いつつあるものは何なのかを立ち止まって考える心の余裕がないということだ。だが事件はまだ、何一つ終結していないのだ。走りながらそれを考え続ける社会部でありたいと思う。

さとう・あつし 1982年入社 岐阜
総局(現岐阜支社) 東京社会部 警視
庁 司法担当などを経て 03年7月から
取材担当デスク

◇関西三空港時代◇

半径25キロ圏 共存の行方は

▶三浦 恒郎
(産経新聞大阪本社)

2月16日、関西は「三空港時代」を迎えた。この日、神戸市沖の海上に神戸空港が開港。同じく海上空港である関西国際空港、兵庫県伊丹市と大阪府豊中市にまたがる大阪国際(伊丹)空港を加えた三つの主要空港が、半径わずか25キロ圏に共存することになったのだ。

三空港は共存共栄を目指し、関空が西日本の国際拠点空港、伊丹は国内線の基幹空港、そして神戸は地域需要を担う地方空港と役割を分担し、約2000万の人口を擁し、首都圏に次ぐ経済規模を持つ関西の航空需要にこたえろと期待されている。

神戸市と周辺地域にとって、新空

港はとりわけ大きな意味を持つ。

従来、この地域の在住者が飛行機を利用するには、いったん大阪に出て私鉄や地下鉄、モノレールを乗り継いだり、空港バス、タクシーなどで伊丹空港に向かわなければならなかった。関空はさらに不便。だが、神戸空港の開港で「空の玄関」へのアクセスはぐっと便利になった。

しかもスカイマークエアラインズなら神戸―羽田空港の料金が1万円ですみ、空港と都心部のアクセス料金を考えても新幹線より安くあがる。このため、「神戸から飛行機で東京出張に出かけるサラリーマンが増え、関東から神戸に遊びに来る観光客も増加する」(地元財界人)とされる。

人の移動が活発になれば新たな消費が生まれ、関連企業の収益アップ、新たな企業進出といった波及効果が望める。神戸商工会議所の水越浩士会頭(神戸製鋼所会長)は、「観光や集客機能の強化はもとより、物流機能の拡充、新産業の創造・誘致などに弾みがつく」と期待を表明しているほどだ。

ところが、雲行きは怪しい。神戸市は新空港の利用旅客数につ



3 空港の概要 2.16にオープンした神戸空港

	大阪国際空港	関西国際空港	神戸空港
滑走路	A 1828m B 3000m	A 3500m B 4000m	A 2500m
利用時間	7-21時	24時間	7-22時
発着回数	13万2520回	3万8293回	2万回
旅客数	1895万人	507万人	319万人
位置	大阪・梅田から10*	大阪・難波から35*	神戸・三宮から8*

(注)関空B滑走路は2期工事中。大阪国際の利用時間はダイヤ設定時間。発着回数と旅客数は国内線での比較(2005年速報値)。神戸の発着回数は上乗、旅客数は目標

いて年間319万人の目標を掲げているが、航空各社が就航させるのは乗客数が少ない中小型機が中心で、「260万人から270万人がいいところ」(大手旅行会社)という。

借金で調達した建設費を空港周辺の土地売却益で返済する神戸市の計画も、売却価格が高すぎて実際にはほとんど売れず、すでに大きな狂いが生じている。

そこで、難局を打開するために、神戸空港は水面下で航空会社に伊丹空港からの路線シフトを働きかけ、伊丹は関空からの移転を促すとみる関係者は少なくない。

見えている。その際、地の利の悪い関空が生き残れる保証はない。

一口メモ 神戸空港

神戸市が総工費3140億円の90%超を拠出し、運用する地方空港で、愛称はマリニア。2月16日、ポートアイランド沖に造成された空港島に開港した。JR西日本と阪急電鉄、阪神電鉄、市営地下鉄が乗り入れる神戸市交通ポートライナー(中央区)から新交通ポートライナーで約17分と、アクセスの良さ(路線が走り物。日本航空と全日空、計27往復を運航し、このうち、ビジネス需要が高い「ドル箱」の羽田便が11往復を占める。

みうら・つねお 1985年日本工業新聞入社 94年産経新聞東京本社経済部に異動し 2004年から大阪本社経済部

リレーエッセー

札幌 ③
駆け出し時代

アーケードの下とは
いえ厳寒の中、老舗の
並ぶ札幌・狸小路商店
街で福引の順番を待つ
大勢の市民がいた。40
年前もいまも変わらぬ
年末いつもの光景である。いつも
と違ったのはこの福引で特等は当
たらないし、1等当選者もほとん
ど出ないことだった。福引事務を
取り扱う商店組合の職員が係りの
学生アルバイトと共謀して特等賞
と1等賞を山分けしていたからだ。

当時、「東北(トンペイ)まわり」と呼ばれる札幌の駆け出しサツマわりが繰り返していた取材方式があった。札幌にあった中央、東、北、西4署のうち3署を夕刊時間帯に2回まわる。クラブのある中央署はちよつと先輩がまわった。徒歩2、3分の道警本部クラブには日常、キャップたちが詰めていた。だからトンペイ時代は夜回りでも3署の刑事の家のほかはいささか敷居が高かった。
トンペイ組は中央署クラブを基地に車でやみくもにまわり、途中事件にぶつかれば現場へ急行す

る。夕刊最終版には午後3時半頃まで突っ込めた。西署のできる前、東署、北署をまわった記者たちが「東北(トンペイ)まわり」と命名したと言われる。

その日午後、クラブを出ようとしたところへ電話があった。「ともかく来い」。ある署の副署長からだった。駆けつけると「署長は出張。刑事官も先刻出た。うちで話そう」と近くの官舎へ。そこで知らされたのが半年前の狸小路事件。事件内容か

トンペイまわりと人の情

▼大橋 弘

いま、クラブのあり方がさまざまに論議される中、黒板協定は大幅に減少したと聞く。クラブ内の私的約束である黒板協定はやはり最小限がいい。リークの理由は少々思い当たる節があるけれども、あえて尋ねなかつた。借りとも言えない借りを返すあうんの呼吸の出来事だったのか。札幌で触れた多くの人の情のうちのひとつだったことは間違いないと思っている。



中央署を後にした直後に刑

元毎日新聞社会部記者
現 中部 大学教授
「このシリーズ終わり」

■会議報告■
第351回企画委員会

(2・9 宴会場)
5月24日の総会記念講演の講師候補を決定した後、今後のゲスト候補について協議した。

出席 宇治委員長、宮田(謙)、山田、中井(良)、中井(康)、岡田(直)、脇、矢島、春名、稲田、影山、川戸、井田、角南、和田、岡田(晃)、鳥居、三好の各委員。

第269回会報委員会

(2・10 大会議室)
3月号の編集について協議した。

出席 住田委員長、石田、伊藤、仙石、高橋、豊田、西田、松本の各委員。

第342回役員資格委員会

(2・16 小会議室)

共同通信の委員交代(伊藤修一編集長から奥野知秀編集局長)が報告された後、3月1日付の会員入退会を審議し、理事会に答申した。

出席 金子、芹川、奥野、今田の各委員。

第420回理事会(書面)

ラジオ関西(古川潤代表取締役社長)の法人会員入会を承認したほか、左記の役員の一部交代を了承した。

△理事△

中国新聞社
(新) 目 光紀 東京支社長
(旧) 大前吉文

■あの戦争を伝えたい 東京新聞社会部編

菅沼 堅吾 東京新聞社会部長

東京新聞社会部が「戦後還暦」という節目の年に、通年で連載した企画「記憶 新聞記者が受け継ぐ戦争」を基に加筆し、再構成した。東京大空襲、原爆投下、中国・韓国への加害、戦時下の記者、シベリア抑留、BC級戦犯などをテーマに、無名の庶民、一人一人の身に起きた事実の記憶をもつて、あの戦争の実相を伝えることが目的。「戦争を知らない世代」の17人の記者が、戦争体験者の記憶を心に刻む決意で取材した。命が軽くなっている今の日本社会のありよう、日本の針路について考えるきっかけを提供できれば、と願っている。(岩波書店、1680円)

■日本のコンテンツビジネス ネット時代にどう変わる

猪熊 建夫(毎日新聞出身)

アニメ、漫画、ゲームソフトだけではなく。放送、新聞、出版、音楽、映画……と、コンテンツビジネスは幅広い。本書は、このインターネット・ブロードバンド時代に、多様な

コンテンツビジネスがいかに変わっていくかを、論述しています。

ただし、高速道路(ブロードバンド)ができて、そこを走る車(コンテンツ)がなければ、無用の長物になってしまおうでしょう。「問題の本質はコンテンツにある」ことを、強調しています。(新風舎 1680円)

■アカシアの町に生まれて 劉鴻運自伝

田所 泉(訳) (日本新聞協会出身)

翻訳とはいえ、自筆原稿からの訳し下ろし、つまり初めものです。著者は現在76歳、大連の資産家の嫡子に生まれ、日本人の「国民学校」卒業まで同学年でただひとりの中国人男生徒であり、1948年から人民解放軍の一兵士として解放戦争に参加しました。除隊後は教師。「右派分子」とされて入獄9年、文革では一家で農村に「下郷」すること13年、と辛酸をなめました。一介の無名の市井人にすぎないのですが、革命戦争を生き延びた阿Qが語ればこうもあるうかとは、著者と同級生だった訳者の感想です。(風濤社 1890円)

■木鐸 平成の風に聴く

田中洋之助(毎日新聞出身)

私はこのたび、コラム集「木鐸」を出版した。目次を一目見ればわかる通り、過去10年にわたり国民の興味を集めた政治、経済、外交問題など硬派のテーマだけでなく、人物論、書評、映画評など、私がつど興味と関心をいだいた文化的問題にも触れ、これらを通じて、平成日本の風向きを占った本である。

日本丸という船は一体どの方向に針路を向けて走っているのか。私が願うのは、再び針路を誤り、世界的に孤立するようなことは絶対繰り返さないことです。これはやさしいようで意外と難しいのではないかと思っています。(ライフ社 1995円)

■世界のスターデザイナー43

堀江瑠璃子(朝日新聞出身)

昨年末刊行したこの本、年が明けてうれしいことに日経、週刊朝日、ブレイク、フジテレビなどで取り上げていただいた。そんな中で面映ゆいながら、私のお気に入りのレビューはネットの本屋アマゾンの「きうびい」さんのもので、「日本最強の

ファッションジャーナリスト堀江瑠璃子さんによる彼女にしか綴れない裏話&トップデザイナー43人の紹介とインタビューがぎゅっしり。マークジェイコブスのようなノリノリのデザイナーの行き先明るそうな紹介、そして先行き不透明なジルサンダーの隠れたエピソードなど。分厚い本ですが、これだけ濃い内容が詰まっているとお買い得……。ファッションに疎い新聞社の調査部や資料室にも、ぜひ。(未来社 2940円)

■広告―ものと人間の文化史130

八巻 俊雄(日本経済新聞出身)

フランスの広告クリエイター、ロベール・ゲランは「広告がなければ、われわれはまだ洞窟の中で暮らしているだろう」と書いている(原書はフランス人は広告が嫌い「Les Français n'aiment pas la Publicité」) 広告は人に代わって媒体が情報を伝えるので、情報の伝達は無限に広く、また到達者当たりの費用が安く

なった。本書は広告の発生から、今日の多様化した消費生活ができあがっていく過程をくわしく述べている。

(法政大学出版局 2835円)

情報発信

クラブ施設では会員による各種の会合が行われています。企業や大使館などの賛助会員も記者発表の場としてクラブを利用しています。

■総選挙とイラク新政府の成立

中東調査会の月例講演会。同調査会の 大野元裕 上席研究員が講演した。(2. 3 10階ホール)

照会先：中東調査会 <http://www.meij.or.jp/>

■企業フィランソロピー大賞贈呈式 & シンポジウム

本業を通じて社会に貢献する企業を顕彰する「企業フィランソロピー大賞」。第3回の今年カタログ雑誌「通販生活」で知られるカタログハウス社に贈られた。環境問題や社会問題に配慮した商品販売や同社の理念が認められた。また料理のつまモノに使用する木の葉の活用事業によって高齢者を働き手とし、地域再生に成功している、徳島県上勝町の株式会社いりどりに特別賞「地域共生賞」が贈られた。このほか大阪市信用金庫に「コミュニティ・フィランソロピー賞」、トヨタ自動車バイオ緑化事業部に「奨励賞」など。(2. 7 10階ホール)

照会先：日本フィランソロピー協会 <http://www.philanthropy.or.jp/>

■日本水フォーラム記者会見

3月16日からメキシコシティで開催される「第4回世界水フォーラム」に関するブリーフィング。資源、環境、安全保障、危機管理といった側面から世界の水問題について様々なセッションが予定されている。尾田栄章事務局長らが概要と取材等を説明した。(2. 8 大会議室)

照会先：日本水フォーラム <http://www.waterforum.jp/jpn/>

■岩井肇先生を偲ぶゼミ生の会

13回忌をむかえた日本大学新聞学科の元教授・岩井肇氏を偲んで、マスメディアで働くゼミOB生約40人が出席した。(2. 10 宴会場)

■ケーブルテレビ・シンポジウム

ケーブルテレビ情報センターは、気象庁と電子情報技術産業協会(JEITA)による「緊急地震速報」のIT自動防災システム運用と実証試験状況について、パネルディスカッションを行った。JEITAの杉原義得プロジェクト推進部長の講演、入間・飯能・上越・半田・可児・四日市・新居浜のCATV局担当者のパネル討論があり、80人が聴講した。震度3以上の地震が、早ければ16秒前に予報できるこのシステムは、ケーブルテレビで有効に機能することが実証された。(2. 16 10階ホール)

照会先：ケーブルテレビ情報センター Tel: 03-3549-0875

■大橋伸一さんを偲ぶ会

法廷スケッチの第一人者・大橋伸一さんを偲ぶ会が行われ、作家の佐木隆三氏や元プロ野球コミッショナーの

新しいOB会員

川島廣守氏、放送、出版各社の関係者など約100人が出席した。大橋氏は生前に著書の刊行を望んでいたという。一周忌の前に出版された「法廷絵師は見た!」が参加者に配られた。(2. 17 宴会場)

■「いま、戦争と平和を考えるーイラク戦争とは何だったのかー」

「戦争と平和」に対する日本ペンクラブの活動・意思表示のために2001年から行っている連続シンポジウム。第5弾の今回は、第1部でアジアプレス野中章弘代表が「報道されないイラク戦争」と題して講演。第2部は井上ひさし(ペンクラブ会長)、金平茂紀(TBS)、田岡俊次(朝日)、吉岡忍(ノンフィクション作家)各氏らによるシンポジウム「戦争と報道 報道はどこまでが真実か、報道の自由と不自由」。出席者は約400人。(2. 18 10階ホール)

照会先：日本ペンクラブ Tel: 03-5614-5391 <http://www.japanpen.or.jp/>

<http://www.jnpc.or.jp/>

HP「会見速記録」：2月の新規掲載

- 新たに下記の「会見速記録」を追加しました。
- 「一つの中国が基本」竹入義勝公明党委員長(1971.7.20)
- 「国際通貨不安と今後の見通し」柏木雄介大蔵省顧問(1971.8.31)
- 「現在の経済現象を『仮説』する」武者陵司ドイツ証券東京支店副会長兼CIO(2006.1.20)
- 「繁栄するアジア共同体の構築に向けて～地域協力と経済統合の役割～」黒田東彦アジア開発銀行総裁(2006.2.8)
- 「アジア太平洋共同体構想－カナダの視点」ジョゼフ・キャロン駐日カナダ大使(2006.2.15)

バー、レストラン、宴会

予約電話 和食3503-2723 洋食3503-2766

**吉
カクテル****3月：Cocktail 虎のシッポ**

<干支シリーズ>

3番目の干支寅からイメージしたオリジナル・カクテルです。ホワイトラム、ダークラム、キュラソ、レモンジュースでアレンジしました。おためしください。

**和
食****花見懐石 (3月31日まで)**

雪解け、花びら、竹の子…冬の名残りや春の訪れをイメージした品々をそろえました。冷酒つきで5250円です。(板長：薬科浩)

先付：根芋酒盗漬 椀盛り：尼鯛雪解け椀 刺身：花びら盛り 焼物：鱈西京焼 煮物：高野鰻巻 揚物：竹の子はさみ揚げ 食事：稲庭うどん 水菓子：桜風味アイスクリーム

**洋
食****春の特別コース (4月3日～5月12日)**

桜鯛のポアレとアサリのリゾットがメインディッシュです。これに前菜、春野菜の温サラダ、桜風味のアイスクリーム、コーヒー、パンがついて2890円です。ランチタイムにも提供します。

好評のビーフシチューコース (2980円) は3月31日までおたのしみいただけます。(シェフ：黒須修一)

個室での歓送迎会プランをご利用ください

春の異動の季節にあわせた宴会プランを用意しました(3月13日～5月13日)。社内の歓送迎会だけでなく、プライベートな集まりにもご利用ください。お一人3500円(税込み)です。洋食9品に寿司、そば、天ぷらがつきます。部屋代、飲物代は別料金ですが、1500円をプラスして飲み放題(2時間)にすることもできます。10人からお受けしますので、早めにご予約ください。貸室担当：03-3503-2724

■寄贈書

川窪正昭会員から『20世紀放送史』(本史上下2巻と年表編)をご寄贈いただきました。お礼申し上げます。

■招待券 ご寄贈いただきました

日本経済新聞社『藤田嗣治展』

クラブの電話 ダイヤルイン

和食レストラン (9階)	会員事務
3503-2723	3503-2725
洋食レストラン (10階)	経 理
3503-2766	3503-2728
貸室予約、宴会打ち合わせ	
3503-2724	
受 付	会見申し込みアドレス
3503-2721	kaiken@jnpc.or.jp
クラブ行事への申し込み	URLアドレス
3503-2722	http://www.jnpc.or.jp

会報委員会

委員長=住田良能

委員=石田昭彦 伊藤三郎 仙石伸也 高橋利行
豊田 幸 西田善夫 松本侑壬子

連 絡=長谷川和子 本庄五月

(電 話 03-3503-2752 FAX 03-3503-7271)

ラジオ関西が入会しました

3月1日付でラジオ関西(本社：神戸)が法人会員として入会しました。登録会員は古川潤代表取締役社長と国広正夫東京支社長のおふたりです。

古川社長は神戸新聞出身で東京支社長時代にはクラブの理事も務めました。

これでラジオ局の会員社は7社となり、法人会員は合計で147社(新聞・通信79社、放送68社)となりました。

会員登録の変更は所定用紙で

会員の入会、退会、区分変更は所定の「変更届」があります。異動がありましたら、事務局の会員事務担当の斉藤(3503-2725)までご連絡ください。入退会は会員資格委員会にはかられます。

クラブタイが新しくなりました

記者会見をしたゲストに贈るネクタイが新しくなりました。これまでのものより落ち着いた色調です。銀座和光製でクラブのマークが入っています。ご希望の方には7000円で販売しています。プレゼント用のケースもありますので、出張先や友人への贈り物にいかがでしょうか。



ほかにクラブの記念品として万年筆、ボールペン、カフス、写真立てもあります。受付に展示していますので、ご覧ください。

ほかにクラブの記念品として万年筆、ボールペン、カフス、写真立てもあります。受付に展示していますので、ご覧ください。

<訃報>

下記の会員の方々が死去されました。謹んでお悔やみ申しあげます。

▼日下雄一会員(テレビ朝日、59歳) 1月5日がん性胸膜炎のため▼大村立三会員(読売新聞出身、78歳) 同25日肺炎のため▼根来昭一郎会員(毎日新聞出身、76歳) 2月4日急性肺炎のため▼都留重人会員(朝日新聞出身、93歳) 同5日呼吸不全のため

<会員現況> 法人会員 147社 基本会員 807人
個人会員 1,664人 法人・個人賛助会員 77社 188人
特別賛助会員 73人 名誉・功労会員 10人

計 224社 2,742人

今後の行事予定 (3/3現在)

3.13(月) 15:00~16:30 (10階ホール)

シリーズ研究会「憲法」⑧

長谷部恭男東大教授

18:30~19:30 (10階ホール)

北側一雄国交相 記者会見

3.15(水) 15:00~16:30 (10階ホール)

シリーズ研究会「憲法」⑨

西修駒澤大学教授

4.12(水) 12:00~13:30 (10階ホール)

増田寛也岩手県知事 昼食会

行事案内専用電話 03-3503-3764

日時の変更なども含め、最新のクラブ行事をテーブルでお知らせしています。

写真回廊

撮影 石井 諭 (毎日新聞東京本社
写真部)



カーリング女子イタリア戦 (2.20 現地時間)

氷上の対局

せんないことを言うのはやめよう。
「あそこで転倒しなかったら……」

「体調さえよかったら……」

「風向きさえよかったら……」

汗と涙は、流せば流すほど報われるな
どというの、しょせん勝負の厳しさを
知らない者の慰めだ。

結果は受け止めるしかない。トリノ冬
季五輪、惨敗。唯一、フィギュア金の
荒川が救いだっただ。

せんないことを言うのはやめて、思わ
ぬ発見もあったことに目を向けよう。

カーリング。なんと面白い遊びなのだ
ろう。1投ずつ交互にしか投げられない。
ひとつの石は、それだけでは裸同然の
弱々しい存在だが、布石が生きると強固
な存在にもなる。それをまた、1投が突
き崩す……。1時間半ほどのゲームの間
に、静かに流れる時間の濃密さ！

スピードと力に支えられたテクニク
を競う種目がほとんどの冬季五輪。そん
な中で、これは異色ではないか。若さが
ものを言う競技ではない。

囲碁に似ている。チームによる対局だ。
なにも氷上に限ることはない。ボーリン
グのレーンで、モップにワックスを塗れ
ば、どこでもできそうだ。高齢者の人気
ゲームになるに違いない。

空想が愉快にめぐる。

(橋場 義之)